
こんな恋愛してミル？

希里 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな恋愛してミル？

【Nコード】

N6320B

【作者名】

希里 凜

【あらすじ】

里中^{こい}恋。今まで付き合った男は高身長、高学歴、高収入。。。いわゆる3高。そんな恋が出会い興味を示したのは…。

第1話 あれはアメの日。

こんな恋、愛してミル？

高1の頃から付き合った男は、ざっと12×12。（これであたしの歳も分かるかしら？。）

付き合う男は、高身長、高学歴、高収入、いわゆる3K。

そんなあたし里中 恋^{こい}はとんでもない男に恋をした。

身長185センチ、身体はそれなりにいい体格で、色は黒くてキレイな顔の美青年…。

違うつ!!。

もとい。身長158センチ、色は肌色で（?）、黒ぶちのメガネをかけていて美青年には程遠い、いわゆる俗に言うヲタクと呼ばれるであろう男に…。

あれは…。

『今日は久しぶりに晴れ間が見えるでしょう…。』

その天気予報の言葉を信じ、梅雨という鬱陶しい時期だということも忘れ、あたしは傘を持たずに家を出た。

「あー、イヤなんだよなあ…あいつつ!!」

久しぶりの澄んだ青空と反対にあたしの心は暗く濁った灰色だ。

今、売れっ子とかなんとかいう調子ブツこいている大嫌いな作家友麗佳先生の原稿を受け取りに歩く。

「こころ出版の里中です」

『あー』

この声聞くとイラつく。

あの性格の悪さでよくこんなキレイな恋愛小説書けるよな…。
いつも感心する。

「では、確かに」

「ご苦労さん」

「失礼します」

「里中さん、あなたもつと愛想良くしたら？」

「あ、はい。すみません」

お前もだろうが…。

いつまでも根にもってんなよ。2年も前に彼氏を取られたことなん
か…。

つて言うか、私も性格ワリイ。

あ、雨が降ってる…。

少しの間でがらりと変わった空模様。

「天気予報の嘘吐き」

このぐらいの雨なら…。

バックを抱え走り出そうとしたあたしの腕を誰かが引っ張る。

（えっ？）

「あ、あの、こ、これ、よかつたら」

どもり、震えながら折りたたみ傘を差し出す、そんな男をあたしは
見た。

タイプじゃない。

あたしより10センチ以上身長が低い。

「あ、いい。そんな…あなたが風邪ひいちゃうよ」

顔を見る。

しかもなんかヲタクっぽい…。

「げ、原稿大事でしょ？」

「あー、うん」

「い、いいから」

優しく落ち着いた声とあたしに折りたたみ傘をぎゅっと握らせ渡す
優しく微笑む男。

ヲタクに見えるいままで会ったことのないタイプの男になぜかあた
しの心は、短時間で興味を示した。

第1話 あれはアメの日。（後書き）

3 高が間違ってたらすみません。

そこんとは大目見てやってくださればありがたいです。
感想お待ちしております。

希凜希。

第2話 恋、ちょっと分からない？

雨の中走って行くあの男の後ろ姿を恋はぼーっと見つめている。
なんだろう？。

黒ぶちメガネのあの男に感じたキモチは。

なんだろう？、あの男のコトを知りたいというこの気持ちは…。

あんな男、あたしのタイプではないのに。

「あ、雨が止んだ。」

空には少しの青空が顔を覗かせる。

ただの通り雨かあ…。

不思議だ、さっきまでのイラつき感は何処へ行ったやら…。

握り締めた折りたたみ傘はバーバリーチェック柄に似た傘。

「分からない。」

恋は傘をバツクにしまうと、会社へと歩く。

何回考えても、あたしがあの男に興味を示す、理由^{わけ}が、分からない。
い。

高身長？…違う。

高学歴？…知らない。

高収入？…どう見ても¥100000000なさそう…。

「わから…ん。」

グダッア…。

机の上に吊り上げられそのまま置かれた蛸のように伸びる、

「なあに？恋、また先生の所でなんかあった？。」

「ほえ？。」

「先生にいじめられた？。」

「んにゃあ…違う。」

「じゃあ、何？。あんたが先生以外のこととで伸びるなんて、嵐でも

来そうだね。がははっ。」

っ、失礼な…。

でも、ほんとどうしたんだろ？。

あー、下手な店の味の濃い辛いミートスパを食べた時に起こるむねやけのようなこのつかっかりは…。

バアンツ！！。

「なんなんだっ！？。」

いきなり立ち上がり大声で叫ぶ。

「わぁ！？何、恋？。」

じーっーっー。

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ…？。

全員が仕事の手を止め、不思議そうに恋を見る。

「あはっ、失礼しました。」

ふっ、あたくしともあるうものが…失態をおく。

高収入、高学歴、ANEKEYANにでも載ってそうなスレエнда

アー美人のあたしがっ！！。

このあたしが、ヲタクみたいな男にねえ。

「はっはっはっ。」

立ち上がり、今度は腕を腰に当て不気味に笑う。

…。

「恋、今日はもう帰ったら？。」

「あ…。」

またみんなが見てるう。

「里中あ、今日はもういいよ…。」

しまった…。

「…はい。」

っち！、今日はツイてない。

思わぬ恥をかいてしまった。

自己嫌悪…。

「はあ。」

エレベーターの中で、うっうと落ち込む、そんな時…。
PIPIPIPIPIPIPI…PI。

「あ、メール。」

FROM 亨

SUBJECT 無題

今夜、行くよ。

イヤァーン、亨、アメリカから帰ってきたんだ。

「丁度良かった、早く帰って部屋掃除しよっ!!。」
救いの神ィー到来。

亨、川上亨は社長の息子、7つ上で高校3年の頃付き合っていた
元カレ。

今は、お互いが寝たい時にメールして、会う。そんな仲。

「おつかえりー。」

ドアを開けるやいなや亨におもいきり抱きつく。

「おわっ!。」

「待ってたよぉ、亨。」

「あはは、相変わらずだな恋。」

いつものご挨拶。

「だって、すごくしたかったんだもん!。」

亨には甘えられる。

甘えモード全開。

二人はキスをしながら、お互いの服を順に脱がしていく。
床の上でもしちゃっ…そんなフインキ。

「俺、もうだめだ。」

「ふふっ、あたしもっ。」

案の定。

玄関の上がり口で行為は始まる。

亨の口が、胸からあたしの下へと下がりまた口元に上がってくる。

「あっ…ん。」

返事をするかのように自然と出る声。

床の冷たさが丁度いい。

恋は亨のナニを握り締め、自分の太ももにあて少し濡れた亨の部分を感じてみる。

「恋、俺がいなかった間、誰ともしなかったのか？」

「ん？。」

「いい男、いなかった？。」

亨がした質問に、ふと黒ぶちメガネのあの男が浮かぶ。

「あ。」

「何、いたの？。」

そう言う、亨はおもいつきり突き刺す。

「んっ、はああ。」

腰を上下に振りながら

「なんか妬けちゃうな。」

「いないってばっ！、人が感じてる時に変な質問しないで。」

「んっ、ごめん。」

「分かったならいい。」

「もう、ダメ。。」

コトが終わり、いつものようにシャワーも浴びずベットで爆睡する亨。

いつもなら恋も亨と一緒に爆睡、なのに今日は爆睡できなかった。なんであの男の顔が浮かぶんだろ？。

ほんと、どうしたんだあたし…。

ずーっと考えている。

あの男に恋をした？。

いや、まさか。

まさかねえ。

えっ？。

恋、自分がちょっと分からない。

第3話。えっ、ヒモ？

まさかこのあたしが…ね。

まさか、まさか、まさか…と、思いながら知らないうちにあたしは借りた傘を持ち、あの黒ぶちメガネの男と出遭った、あの大嫌いな麗佳の住むマンションへと来ていた。

はあ…？、あんなヲタクみたいな男がこんな所に住んでるわけないじゃあ…ん。

心でそう思いながら、でも顔は真剣に、高々と聳え立つマンションを見上げている。

こんなところでも遭えるわけがないのに…って言うか。

「ふっ、あたしともあるう者が。」

何を血迷っている。

「さっ、帰るぜ恋。」

恋が開き直り？ながら引き返そうとした時、マンションの玄関の自動ドアが開いた。

「あ、あ、僕、何でも。」

あ、あのどもり、あの優しい声。

声をかけようと振り向いた恋の前にあの大嫌いな麗佳と黒ぶちメガネの男が腕を組んでいた。

「あ。」

「あら、里中さん？。」

げげっ、嫌なところで遭っちゃったよ、しかも嫌な場面見ちゃったよ。

「こ、こんにちは。デートですか？。」

な、何聞いてる恋。

「うふっ、そうなの。」

麗佳は黒ぶちメガネの男の腕をぎゅっと握り見つめる。

「あ、れ、麗佳さん、そんな…照れます。」

真っ赤な顔で照れくさそうに俯く男に恋はムツとする。

「あ、あたし友人が待つてるので失礼します。」

深々と頭を下げそくさと走り出す。

「はあ、はあ。」

さ、最悪だ…あいつは麗佳のヒモだったんだ。

身震いがする。

麗佳に抱かれるあの黒ぶちメガネの男を想像してしまう。

うっ。

あの厚化粧女麗佳の真っ赤な口紅を顔にべっちよりと着けられる黒ぶちメガネの男。

嫌ア、可愛そう。

恋は何を思ったのか、決心する。

「あたしっ、決めた。」

あの黒ぶちメガネの男をあの麗佳から救済してみせる！！

このあたしの色気であいつ（いつの間にかあいつ呼ばわり）を誘惑してみせるっ！。

見てろよ、麗佳っ！！。

待つてろよ、黒ぶちメガネエっ！！。

なーんか方向がずれてる…。

「がんばれっ！、恋！！。」

がんばるんだあ。

第4話 変な恋、黒ぶちメガネ男救出作戦計画。

恋は仕事もせずに黒ぶちメガネの男をつくき麗佳から救出しよう
と（勝手に）作戦を練る。

A・麗佳のマンションで待ち伏せし、拉致監禁しようか？（おっと
これじゃあ犯罪者Kだぜ…）

B・マンションから出て来たところ、可愛い娘^こぶりっ子して借りた
傘を返そうか…

いや、C・このナイスバディお色気作戦（みんな男はイチコロ）
で、傘を返そうか色々案を考える。

「恋、恋…」

隣の席の奈々が恋の肩を叩くが恋は気づかない。

「んー、あれも…」

「恋っ、恋っ！」

「ん？何よ」

ようやく気づいた恋は鬱陶しそうに奈々を見る。

「恋、ほら、編集長が睨^{にら}んでる」

奈々が指すボールペンのずっーと先を見ると編集長が恋を睨^{にら}んでい
る。

やべっ、目が合った〜。

「あ…」

「あんた最近可笑しいよ」

「うっ…」

恋は何かを察知し編集長から目を離し、机の書類に顔を埋める。

「里中」、麗佳先生の原稿はまだかな〜？」

編集長は席から離れ、ゆっくりと恋の方へ近づいてくる。

「恋…来たよ…」

「うっ…ん、殺気を感じる…」

「さっとなっかく〜ん」

ガバッ！！

「行ってくるであります！ー！」

恋はなぜか敬礼をし、机下の トンのバックを左脇に抱えるとそそくさと走っていった。

「はあ…はあ…」

社からそのまま走ってきた恋はどんより曇った空、高々と聳え立つ麗佳のマンションを見上げる。

「はあ…」

なぜかドキドキする。

まだどの作戦を決行するのか決まっていな

い。もし、麗佳の部屋である黒ぶちメガネとばったり遭遇してしまったら？恋にとつて恋は得意分野そのものなのに恋は珍しくナーバスになっている。

ど、どうしたんだ恋？

震える手で麗佳の部屋のナンバーとインターホンのボタンを押す。

『は、はい』

お、男の声…。絶対、あの黒ぶちメガネだ。

こ、こんな早く遭遇してしまうなんて…し、心臓が破裂しそう。

恋は気づかれないように小さく深呼吸をし、いつものあたし、あたし。

「あ、こころ出版の里中と申しますが…」

『あ、はい、ど、どうぞ、い、今開けますね』

「はい…」

ガクッ…。

あ、こんな早く…しかもあいつ麗佳の家の中にいるよ。

恋は肩を落とし、愕然とした。

作戦B？C？

俯きながらマンションの玄関ロビーのドアを開けようとするが開かない…。

し、しまった、考え事をしてたら閉まってしまった。

『…は、はい。あ、さ、里中さん、ど、どうされたんですか？』

「す、すみません、閉まってしまって…」

『あはは、あ、開けますね』

「…はい」

シヨック…笑われてしまったよ、このあたしが。

作戦C（もつとも得意分野）決行は見事無残に散ってしまいそうだし…。

残るは、作戦A / 作戦B。

「拉致監禁とぶりぶりかあ…はあ…」

エレベーターを降り、バックから鏡を出し落胆気味の自分の顔を見る。

「こんにちは」普通の顔。

「こんにちは」諦めたお色気顔。

「こんにちはあ」ぶり顔。

麗佳の部屋の玄関前で色々練習してみる。

「うふっ、こんに…」

力チャ。

作戦Cお色気作戦練習中（諦められない）に、

「さ、里中さん、な、何してるんです？」

あの黒ぶちメガネの男がいきなり玄関ドアを開けた。

「うげ、あ…」

「あ、あまりにも、お、遅いんで気になって…」

恋は驚き、よりによって魚の鯉がぽっかり口を開けたような間抜け

顔で、

「あ、こんにちは…」

黒ぶちメガネの男に挨拶をした。

「あは、こ、こんにちは」

すごい優しい顔で恋にニツコリ微笑む黒ぶちメガネ男。

ドキ…ドキッ…。

嗚呼…足のつま先の血液が脳天まで急上昇し、そしてまた、足のつま先まで急加速で流れていくのを感じる。（大袈裟？）
なんなの…この微笑みは…。

「あ、先生の原稿をいただきに参りました」

「ど、どうぞ、な、中で待っててください」

「はい…」

恋はミュールを脱ぎ、揃え、黒ぶちメガネの男の後ろをついて歩いた。

第5話　ますます惚れちゃう男、ますますウザイ女。

「座ってお待ちください。今、紅茶入れますね」

「あつ、おかまえなく」

カウンター越し、恋に紅茶を入れてくれる黒ぶちメガネ男。部屋中に甘いなんとも言えないいい香りが漂う。

恋はじーっと黒ぶちメガネ男の顔を見つめた。

不思議な感じ…外見はヲタクそのもののなのに、こうして見てるとても品のある男性に見えてくる。

「ど、どうぞ」

差し出してくれる紅茶。

「はい、いただきます」

会釈し、珍しくしおらしい感じの恋はそつとカップに口をつける。

あ、なんて美味しいの…。

程よくマンゴの味がする。

「ど、どうですか？マンゴティー、僕大好きなんですよ」

黒ぶちメガネの男は窓の外を見ながら嬉しそうに話す。

「初めて飲みました。とても美味しいです。あ、あのひとつお聞きしていいですか？」

「は、はい？」

「お名前は？」

「ぼ、僕ですか？木下ミッルと言います」

「木下さんですか」

「は、はい」

恋はカップをテーブルの上に置き、ミッルを見つめニッコリと微笑むとミッルも恋の顔を見つめニッコリと微笑んだ。

二人の間にマンゴティーの甘い香りと優しい空気が漂っている。なんていい感じだろう…。

このまま…このいい空気とこのいいフインキに流されてしまいた…

い？

そう感じた恋のハッピーな気持ちを急降下かさせるかのようにバンッ！！

「できたわよ」

奥の部屋からボサボサ頭、ノーマークの顔で麗佳が出てきた。

おっっ！

こんないい感じの時に現れやがって…。

「あ、はいどうも…」

恋はミツルがいるせいか引きつりギリギリ営業スマイルで麗佳から原稿を受け取る。

「みつくん、私にも紅茶入れてくれる」

麗佳は煙草に火をつけソファーに座る。

「は、はい麗佳さん」

恋は真剣な顔で原稿に目を通す。

いつも思っけど、この麗佳にこの切ない恋愛小説は不釣合いだと思う。

この見るから性格ブス女の織り出す小説にジーンとしてしまう自分が恋には悔しい。

「大変良かったです」

「そう」

麗佳は嫌味な笑みで紅茶を飲む。

恋は原稿を揃え、封筒に入れる。

「良かったね、麗佳さん」

ミツルは後ろから麗佳の両肩にそっと手をのせ、麗佳の顔を覗き込む。

「ありがとう、ミツルのおかげよ」

自分の肩の上のミツルの手をぎゅっと握り閉める麗佳に、

「そ、そんな…」

照れ笑いをするミツル。

そんな二人の相思相愛のような姿を目の前で見せつけられムカつき

ながら封筒をバックにしまふ恋。

「ありがとうございます」

立ち上がり一礼し、

「紅茶ご馳走様でした」

悲しそうな顔でミツルに微笑んだ。

「あ、は、はい」

ミツルは不思議そうな顔で恋を見た。

「ご苦労さん、里中さん」

「失礼します」

恋は麗佳の部屋を後にした。

ますますミツルに惹かれていくのを感じる恋。

まさかこのあたしが…このあたしが…と感じてた気持ち、今日の事で本当に好きなんだと決定づける。

玄関ロビー、ガラス越しに空を見上げる恋。

薄暗く、無数の雨が落ちてくる。

「あ…」

あんなに晴れてたのにまた雨が降ってる。

「もお…ついてない…」

恋はミユールのヒールを床にカッソッカッソッと叩きつける。

あの女と一緒にウザイ雨…。

あんな事でブルーになるウザイあたし…。

恋はバックにミツルが貸してくれた折りたたみ傘が入ってる事を忘れ自動ドアの前に立つ。

「はあ、さつ、行くか」

足を一歩さし出した時、

「さ、さ、里中さん」

エレベーターの方から走りながらミツルが恋を呼ぶ。

「えっ？」

振り向いた恋の前にミツルがまた折りたたみ傘を差し出す。

「…あ、雨が降ってるから…」

「…」

折りたたみ傘…。

ニッコリ笑うミツル…。

「よ、良かったら使って」

「あ、そういえば…」

バックの中にこの前ミツルに借りた折りたたみ傘を入れておいたのを思い出た恋はバックの中から折りたたみ傘を出す。

「あ、そ、それ…」

「返すの忘れてた…ありがとう」

恋は傘を見つめ、また悲しそうな顔をする。

「さ、里中さん？」

「…」

恋はミツルの片方の手に自分が前借りた方の折りたたみ傘を握らせる。

「い、いらないから、つ、使ってください」

両手に握った傘をまた恋に差し出すミツルに恋は俯き首を横に振る。

「…しないで…」

「えっ？」

何かを言う恋の小さな声に耳を傾ける。

「あたしに優しくしないで…」

「あ…」

「お願いだから、優しくしないで」

恋はそう言っと、雨の中に飛び出した。

「あつ、里中さんっ!？」

恋の後ろ姿を見つめるミツル。

そんなに優しくしないで…優しい顔であたしを見ないで…。
雨の中、夢中で走る。

雨の中で流れる涙は誰にも気づかれない。
恋で、涙なんて流した事なんかなかった恋。
今度の男は、なぜか強敵に感じる。
きつと彼はあたしに靡かない…そう感じる。
お色気だけで迫ってもきつとあたしを見てはくれない。
麗佳はどんな感じて彼を振り向かせたんだろう？
初めて感じるなんんだか分からないこの気持ち。

恋は濡れたままの服で会社に戻った。

みんなが不思議そうにあたしを見てる。

「ただいま戻りました」

「こ、恋、どうしたの？」

足のつま先から頭の天辺、指の爪先までいつも完璧な恋の少し乱れ
たびしょびしょの姿を初めて見る奈々は戸惑う。

「あはは、傘忘れちゃった」

苦笑い、濡れてるから気づかれないよね、涙。

「服、替えあるの？」

「あ、うん。確かスーツがある」

「風引くから先着替えておいで…」

「あ、うん」

恋は机にバックを置き、更衣室に力なく歩く。

ああ、最悪だ…。

鏡の中の自分の顔、化粧がだいぶはげてる…。

ウォータープールのマスカラで良かった。

それだけは誉めれる。

化粧の取れかかったあたし、ノーメイクの麗佳。

ボサボサ頭の麗佳、雨でパーマが取れてるあたし…。
ますますウザク感じるあの女。

「何比べてるんだか…バカ、あたし…」

こんな気持ちにさせるなんて。
ミッル…覚えとけよ…。

第6話。こんな夜は…。（前書き）

。。。お知らせ。。。先ほどペンネームを希凜希からキリンキに変
更させていただきました。

第6話。こんな夜は…。

仕事帰り、恋は携帯電話のデスクトップの一番目 トオル のボタンを押す。

プルルルル…。

中々出ない亨。

「仕事かデートか？」

もうワンコールして出なかったら…。

『もし、恋？』

でたっ！

「あっ、亨、忙しかった？ごめんよ」

『大丈夫だよ』

亨の声にホッとする…。

「今晚、お暇」

『後、一時間したら行けると思うよ』

恋は辺りを見回す。

「今何時だっけ？」

『十九時』

「ご飯作って待ってるよ」

『おう、分かった』

「バイ」

今晚はとりあえず亨をキープした。

こんな気持ちの夜は亨とするに限る。

「さ、急いで帰ろう」

恋は自宅マンションまでの家路を急いだ。

自宅に着いて、一時間ほどするとほぼ時間通りに恋の家のインタ

ーホンのチャイムが鳴る。

「はい」

『亨だよ』

モノクロの亨、一段と格好いい。

「あれ、今日は鍵持ってないの？」

『お前この時期忙しいだろ？早く開けるよ』

「あつ、そうか、今開けるよ」

この週は、締め切りやなんかでバタバタだもんね。最近、あたしおかしいからみんなが気を使って早く帰らしてくれるから早く帰れるんだ。

嗚呼、ダメだあたし、めざせ編集長！…なのに。

自分の頭に拳骨をお見舞いする。

がんばれ恋、がんばれ二十八歳！！

「しつかりしろよ、恋、おー！」

拳を振り上げた恋に、

「こ、恋、何してんだお前：大丈夫か？」

イケメン亨がキョトンとした顔でケーキの箱とバックを片手に恋を見ていた。

「あ”…」

しまった…あたしともあろうものが…。

「熱…あるのか？」

ブルブルブルッ！！…大きく首を振る恋。

「ないよ…」

恋は亨が手に持つ、バックとケーキの箱をキッチンカウンターの上にそつと置き亨のネクタイを外す。

「本当に大丈夫か？」

心配そうに恋の顔を見る亨。

「大丈夫だよ、うふっ、ただの欲求不満…」

ニツコリ笑い恋は亨にキスをする。

「自分で言っなよ」

「あはは…だね？」

一つ、一つゆつくりと亨のワイシャツのボタンを外す…程よい筋肉質でセクシー、いままで付き合った男の中でナンバー・ワンの亨の身体。

そんな亨の胸板にキスをする恋。

「恋…」

「ん？」

「両腕上げて」

「ん」

両腕を上げる恋のホルターネックのキャミソールを上げる亨、小指がゆつくりと恋の肌をなぞり、

「きやはっ、あ…」

くすぐったさと気持ちいい感触が同時進行する。

亨はキャミソールを床に捨てると、恋をテーブルの上に乗せ今度は恋のブラのフロントボタンを外す。

ブラから開放される恋の豊満な胸。

亨は恋から外したブラを触り、

「俺、本当にこれ好き」

恋は悪戯っぱい顔で亨に笑いかけ、ブラを奪い取り遠くにほおり投げる。

「あのブラだけ？」

甘えた声と目線で聞く恋。

「はは…お前も好きだよ」

亨は恋の胸にそつとキスをする。

「この体勢も燃えそうだね？」

「ああ…」

恋は亨の頭を抱きかかえ、髪の毛を捻りながら亨の愛撫に感じる。ミツルのセックスはどんな感じなんだろう？

ふと、そんな事を恋の頭をよぎった。

嫌だ…こんな時に…あいつの事なんか…恋は必死に亨に感じてみせる。

「亨」

「んん？」

「すごくいいよ」

「ん」

「いい…よ…」

恋は目を瞑り、亨に抱かれながらミツルに抱かれた感じを妄想する…。

亨のモノがあたしの中に入る…。

ミツルのモノはどんなだろう？想像する。

あ、気が遠くなりそう…。

「出すよ」

その声で妄想のミツルから現実の亨に引き戻される。

「うん」

「…」

二人は尽きた…。

身体は亨…心はミツルに尽きる恋。

「お前、どうした？」

「ん？」

「いつもいいけど…いつもよりなんかすごくいいよ」

「そう？亨がいいんだよ」

「シャワー浴びてくるよ」

「あ、うん」

亨の後ろ姿…あの亨にあいつを感じるなんて…。

あいつ、このあたしをマジで狂わせようとしている。
ミツル。

木下ミツル…。

こんな恋^{こい}…愛^{こい}してミッル。

第7話。あいつが電話をくれた朝。

ピピピピピィ。

ピピピピピィ。

目覚まし時計のアラームが鳴る。

タオルケットの中からヌォーと恋の手が目覚まし時計の方へと伸びる。

あわや恋に捕まりタオルケットの中に引きずりこまれる目覚まし時計????

「うあああ、もうっ、朝か」

タオルケットを足で蹴飛ばし起き上がる恋（どんな女だこいつ）。

「んんん」

大きく背伸びをし、

「ふわぁぁ」

大きくあくびをする。

あ、言っておかないと…恋は男がいる前ではこんな事を絶対しない。

亨は昨日夜遅くに帰って行った。

恋は自分のマンションに亨を泊まらせないし、亨はどれだけ遅くなくても恋のマンションには泊まっていかない。

それが恋と亨のセックスフレンドと恋人の違いらしい…。

恋は両手を大きく伸ばし左右に振る。

「さぁ、今日もがんばるぜえ」

ベットから下り、タオルケットを綺麗に敷き直すと、恋は洗面所で朝起きたら会社が休みでも必ずするうがい薬でうがいをする。

「ケロケロケロケロ…」

三回ぐらいうがいをしたぐらいの時、

ルルルルル…。

電話の呼び鈴が鳴る。

ん？こっちの電話が鳴るなんて珍しい…。

恋はグラスを置き、洗面所にある子機を取った。

「もしもし？」

『あ、あの…ぼ、僕、木下です』

き、きつ…きのしたあゝ！？

「…」

木下って木下ミツル?????????

子機を持つ手がプルプル震える。

『あ、あの、さ、里中さんですよ？』

しっかりしろ、恋。

「ふはあい、どうしたんですか？」

声が裏返る。

し、しまった…。

『あ、あの、昨日、よ、様子が変な感じがして…』

様子が…。恋は鏡の自分の顔を見つめ、

「あ…」

気づいてたんだミツル。

『あ、あんな事言ってたし…き、気になって…いそ、忙しいとは思

ってんですが…』

お願いだから、優しくしないで…。

「あ…」

『さ、里中さん？』

電話越しの優しいミツルの声、胸うぶなが温くなる。

「何もないよ…木下さん。大丈夫だよ、木下さんありがとう」

目の前にいるわけでもないのに心臓がドキドキしてる。

『そ、そうならいいんですが』

「はい」

『あ、朝から電話してすみません、では』
電話を切ろうとするミツルを恋は、

「あつ、あの、木下さんっ」

咄嗟に呼び止めた。

『はい?』

「今度、傘のお礼させてください。傘もまだ返してないし…」

『あ、あ、え〜と』

考え込むミツル。

もしかして困ってる? あ、そうか…ミツルには麗佳がいたんだ。

早く打つ鼓動、締め付けられるような感じ、急に胸が苦しくなる。

恋は震える声で、

「れ、麗佳先生がいるから…迷惑、ですか?」

『あ、えっ、』

「ごめんなさい、やつぱいいです」

どうしたの恋? あんたがあの麗佳に遠慮するなんて…。

いつものあたしならどんな事しても欲しい物ものは必ず手に入れるのに…。

どうして一歩引いてしまうの?

『さ、里中さん、いいですよ』

「えっ?」

『ちょっとびつくりして…』

「びつくり?」

『さ、里中さんみたいな、じよ、女性が僕みたいな男を誘ってくれるなんて…お、思わなくて』

「木下さん…」

『い、いつにしますか?』

「今日、今日の昼の一時はどうですか? ランチ、ランチしましょう」

？」

『は、はい。ど、どこに行けばいいですか？』

「んー、マロンってお店知ってます？」

『あ、はい。こころ出版社の近くですよ？』

「はい」

『で、では後で…』

電話を切った後、

「よっしゃあー！！」恋はガッツポーズをする。
練った作戦実行チャンス到来！！

「さー、どの作戦で実行するか？ムフフ」

…時計を見た恋は啞然とした。
時計の針は九時を指している。

「やばー、遅刻遅刻ー」

恋は急いでノーメイクに近いナチュラルメイクをし、急いで部屋を後にする。

ミツルと話しているとゆったりと時間が流れる感じがする。
飾らない自分をさらけ出せる。

不思議な感じ、あたしがあたしじゃない感じがする。

「ふふ」

自然と出る笑み。

昨日の雨が嘘のように止んだ朝。

「気持ちいい。」

こんなに朝が気持ちがいいなんて、今まであんまり思った事がなかった。

かけてくれるなんて思いもしなかったミツルからの電話。

たったあの電話一つがこんなにもあたしを幸せにしてくれる。

好きだよミツル。

絶対私に惚れさせてみるから、覚悟してるよ！ミッル。

第7話 あいつが電話をくれた朝。(後書き)

ほとんど電話の会話のないようでした。
よかつたら感想お待ちしております。

キリンキ。

第8話 ホット、ランチ。

会社に行く足取りがこんなに軽やかなんで、木に止まって鳴いている鳥の声がチュピチュピ可愛く聞こえるなんてあたしの人生在り得ないって感じだった。

毎日、バリツと完璧メイク、ほとんど毎日ブラックのスーツ、男になんか負けてたまるか、見下されないようにほぼ完璧な自分を作って歩いてきた。

プライドの塊。たかいおんな

「おはようございます」

「おー、里中っ……………」

朝から、バタバタと忙しい編集長の動きがふと止まる。

「はい？」

「……………」

「編集ちょ……………」

編集長の後ろを金魚の糞のようについて歩く新人吉井くんと呼ばれる男子社員も動きの止まった編集長の後姿から視線を移し、恋を見た。

「……………」

「な、ど、どうしたんだ？」

「はい？」

動きの止まった二人を不思議そうな顔で首を傾げる恋。

「……………」

「……………」

「おっはよーございます」

こんな三人のシーンとした場面の中、奈々がいつものような明るい口調で現れた。

「あ、おはよう、奈々」

振り返った恋を見て、奈々も動きが止まった。

なななな……？

奈々の目球が恋の足のつま先から頭の天辺を上がったたり下がったりする。

ピンクのスーツ、ほぼノーメイクに近いナチュラルメイクの恋。

奈々は驚き目を丸め、恋の両腕をガシツと掴み前後に揺する。

「こ、恋？恋？恋っ！」

「な、何っ、みんなして？」

「け、化粧は？何、その入学式のようなスーツは？」

「えっ？」

「て、天変地異が……起こるぞ……」

「なっ！？」

みんなの腫れ物でも見るような引いた視線。

「で、でも、なんかいいよ里中さん」

新人吉井くんがポツリと一言。

「うん、なんかいいな」

「うん、恋じゃないけど、すごくいいよ」

引いたかと思えば、うんうんと頷き今度は褒める編集長と奈々。

「えっ、ほんとにいい？」

みんなの言葉に嬉しくなる恋は初めて見せる純粹で満面な笑みを浮かべる。

「うんっ、いい」

新しい自分発見、いつもの朝のとは違う発見。

こんな感じもなんかいいかも……。――

「さあ、がんばりますかあ」

恋は、デスクにバックを置くと気持ちよさそうに背伸びをした。

仕事を一段落終えた恋は化粧ポーチを持ち、そそくさとパウダールームへと消えた。

いつもとは違うナチュラルメイクに慣れていない恋は、仕事に熱中してる時は全く気にはならないが、

ふと一息つくときさすがに化粧が落ちていないか気になったらしい……。

「……はあ、良かった。落ちてない……」

マスカラのしていない睫毛を人差し指で上げ、鏡に左右の自分の顔を映して見て自惚れる。

まあ、化粧が取れてもいい女なんだけどね。

「はあ、後少しかあ……緊張する」

腕時計の針は十二時五分を告げようとしている。

刻々と迫り来る黒ぶちメガネ男との楽しいであろうランチの時間。

恋がんばれ！

がんばるんだぞ、恋！

いつもにはない緊張、自分に応援をかます。

刻々と迫り来る時間を恋は仕事そっちのけに時計を見ている。

来てしまう……来てしまう。

あうっつ。

現在の時刻はパウダールームから四十分経っている。

ここはビルの五階。ここからマロンまでは、約五分。

今から、第二の化粧直しをして……。

カチッ、カッチ、カチ……。

待ち合わせ場所五分前行動。

よしっ！

「休憩行つてきまーす」

「はい」

よっしやゝ。

カランッ。

「いらつしゃいませ。お一人様ですか？」

「いえ」

辺りをキョロキョロ見渡して見ると、奥の二人用のテーブルに黒ぶちメガネのミツルは座っていた。

さすがキチンとしてる。五分前なのに、もう座ってる。

感心しながら、恋はミツルの待っているテーブルまで、ドキドキする心臓を押さえながらゆつくりと足を進ませた。

「お待たせしてすみません」

「あ、さ、里中さん。ぼ、僕も今さっき来たばかりなんですよ」
恋を見上げて優しく微笑むミツルに恋はぶっ倒れそうになる。

嗚呼……いい……。ヲタクの君の中にもこの気品溢れる笑みとどことなく知性も溢れるメガネの中の瞳。

私はもうあなたに首ったけ。

「そ、そうなんですか？」

誰か壊れそうな私を止めて……え。

恋はブルブル震えそうな手でイスを引くと腰をかけた。

「何になさいます？どれでもお好きなのを頼んでくださいね」

恋はお絞りで手を拭きながらニッコリと笑いかけると、ミツルはそんな恋をじつと見た。

な、何？

あまりにもマジマジと自分を見つめるミツルに恋は戸惑った。

ま、まさか……。口紅がはげてる？

も、もしや……。アイシャドウが……。

「あ、あの、あたしの顔になにか……？」

恋はなにか失敗したのかと気が気ではない顔で、恐る恐るミツルに聞いてみる。

「あっ」

ミツルは心配そうな表情を浮かべる恋の顔を見てハツとし、グラスの水を一口飲み深く息を吐くと「さ、里中さんなんか、ち、違うよ
うな……と」

「へっ？」

「な、なんかいつも……」

ミツルはモジモジしながら言葉をさがし、失敗ではないと安心した恋は微笑み、「あー、今日化粧時間がなかったからナチュラルメイクにしてみました」

「あ……ごめんなさい」

「えっ？」

「あ、僕が忙しい時間に電話かけちゃったから？」

「あはは、まあそれも一理あるけど……違いますよ」

「……ご、ごめんなさい」

「でもこのメイク好評なんですよ？」

「う、うん。そうですね。い、いいですよ。前の里中さんもいいですけど、うん、すごくいい」

「ほ、本当ですか？」嬉しそうに天真爛漫な笑みを浮かべ喜ぶ恋に「は、はい。とても」優しく恋を包み込む笑顔でミツルは返事を
する。

ドキッ。

どうしよう、こんな気持ち産まれて初めて。「あ、注文しなきゃ」恋はミツルの優しい笑顔に上昇してくる血液を気づかれないようにメニュー表に手を伸ばし、テーブルの上にバツと広げる。

「ど、どれにしようかな？」

「どれでもいいですよー。傘のお礼です」

「そ、そんな、よかったのに……」

「いいんです」

楽しいランチのひと時も、一時間という短時間の中、すぐに終わ

りを迎えようとしていた。

「お、美味しかったですね」

「ここはみんなお勧めなんですよ」

「ま、また来たいですね」

「……」

ミツルの一言に恋はドキリとしミツルの顔を見つめた。

「ま、また、ひ、暇な時誘ってください……」

「え……？」

「ご、ごめんなさい。ず、図々しいですね？」

ま、また一緒に？恋はポカリと口を開いたまま首を大きくブルブルと振った。

「はいっ、はい。喜んでえ」

嬉しい、嬉しい、うれしーい！！

「で、では、また」

「はいっ、また」

照れくさそうに手を振り、振り向くミツルの姿を恋は見えなくなるまで見つめた。

ミツル、サイコー！

ミツル、大好き。

ミツルに恋して、恋は少女のように変化していく。

初恋にも似た感覚。甘酸っぱくて切ないけど楽しい恋。

こんな恋、愛してミツル。

第8話 ホット、ランチ。(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6320b/>

こんな恋愛してミル？

2010年10月14日01時33分発行